

# 温故知新メディア散歩

## 木々の豊かさ 稻本正『森の博物館』

人に様々な性格があるように木材といつても針葉樹・広葉樹と幅広い。太さ・長さ・木目・色合い・硬さ・加工度合い・用材場所・耐水性と様々だ。長い仕事の中で木風呂を作っている職人・伝統家具作り・釣具名人にインタビューする機会があり、毎回木工の幅広さ・奥深さに驚かされた。本書はオーク・ヴィレッジ創設者稻本正さんが合計三十の木々を紹介してくれる。(菊地実)

### 木の文明

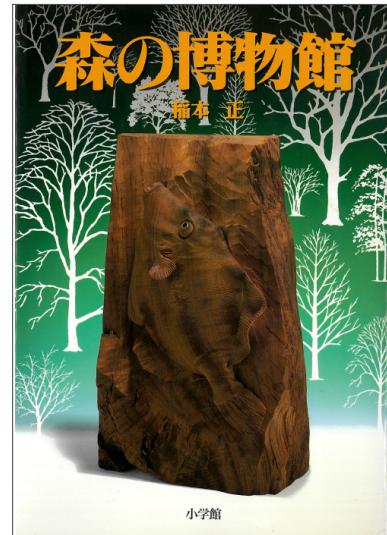
「日本橋に八十四メートルの木造主体ビル竣工」というニュースを聞いて、素人頭で大丈夫かしらんと思った。けれども法隆寺薬師寺は手入れよく、千数百年建っている。石造ピラミット五千年、モロタル・コンクリート使用の古代ローマパンテオン二千年ほどではないにしろ、手入れすれば木製でも数百年は持つ。よく西洋／石の文明、日本／木の文明と言われるが、西洋とて家・家具は木造だった。地中海沿岸、レバノン杉のように伐採し過ぎで森林が失われた事例も少なくない。幸い日本は多湿で国土三分の二が森林である\*1。

三十の木々、トップバッターは杉。もっとも需要が大きな杉を植え過ぎたせいで、スギ花粉症が蔓延している。「10センチ角ぐらいの柱ならば、乾燥した杉でもその中に一升ビン一本くらいの水があるという」(10頁)。

### ＜図表1＞登場する30種類の木々(順不動)

・楡[サワラ]	・杉[スギ]	・楠[クス]
・<木鼠>[ネズコ]	・椿[ツバキ]	・櫻[ケヤキ]
・桐[キリ]	・栓[セン]	・唐檜[トウヒ]
・松[マツ]	・竹[タケ]	・樅[モミ]
・一位[イチイ]	・檜[ナラ]	・楮[コウゾ]
・桂[カツラ]	・桑[クワ]	・栗[クリ]
・櫻[カシ]	・<木品>[シナ]	・柘[ツゲ]
・栂[トチ]	・桜[サクラ]	・槐[エンジュ]
・朴[ホオ]	・<木無>[ブナ]	・樺[カバ]
・漆[ウルシ]	・<木佛>[タモ]	・檜[ヒノキ]

\*難しく読めない字が多い。中には「鰯」と同じような和製漢字も少なくない。



### ＜小学館＞

そういえば和船(川船)づくりの船大工さんが「日向杉が一番」と産地指定していた。杉は柱だけでなく外壁用板にも使われ、「香りもほのかで、酒・味噌・醤油・漬物の樽であろう…特に酒の場合、杉の香りとお酒の関係の微妙さに驚いた」(12頁)「酒のための樽の中でも良いものは源平…杉の赤太と白太を使い分けた樽」を紹介している。

### まかり通る誤訳

筆者が創設者となったオーク・ヴィレッジは檜で、「欧米では森の王様と呼ばれている」(44頁)。「檜の中でも特にミズナラは大木になり、ヨーロッパでは<キング・オブ・フォレスト>と呼ばれる」(48頁)ロビンフッドや北欧神話を読むと、檜は巨人の如く聳えている。ところが「オー

クとはいうのは檜でしょう」と質問されるらしい。「オークは落葉樹で、檜と答えるのが正しい」という。英国では1500～1660年<オークの家具の時代>」(46頁)。

杉・檜が日本建築精華なら、栗は「縄文時代に最も有用だった木」(56頁)。縄文遺跡ではどこでも建材として、さらに食料として栗が植えられていたらしい。近代では鉄道の枕木として大量に使われた。「枕木に使われる例からわかるように、栗は非常に腐食に強い…材になると水にも虫にも強い…木目が適度にクッキリし…野生的な力強さと適度の落ち着き」(59頁)と評価している。

## 道具の進化と材木

木材の四番打者は檜だ。ここでは法隆寺や伊勢神宮に触れている。「檜が神社・仏閣に使われ始めたのは飛鳥以降…縄文時代は栗・檜・樫などの落葉広葉樹…その後は楠・椿などの照葉樹でこれを第一次木の文明」(107頁要約)と論じ、鉄器進歩とともに杉・檜が使われると道具と材木の関係を考察<sup>\*2</sup>。

「檜は杉に比べ少し比重が大きく、色は淡いピンク色で香りも良い。しかも杉より比重が大きい分、非常に強く、粘りがあって削った時のつやも良い。その上、虫や水にめっぽう強い」(107頁)。このことは私事になるが、檜・樫・杉の風呂に入った経験でもよく理解できる。たたし「檜を植林し過ぎると山の土地が痩せてしまう」(109頁)。自然是不思議だ。

## 素材を生かしたもの作り景

しかし杉・檜のようなスター選手ばかりでなく、さまざま

■筆者/ 稲本正=1945年富山県生まれ。1969年立教大学理学部物理科卒、1972年長野県大町で山小屋を造る。1975年岐阜県高山市にオーク・ヴィレッジ(工芸村)設立、1976年岐阜県清見村にオーク・ヴィレッジを移転。1981年東京紀伊国屋書店にショースペース設立。1994年『森の形 森の仕事』(世界文化社)で毎日出版文化賞受賞。『森の惑星プロジェクト』開始。トヨタ白川郷自然学校設立校長。東京農大客員教授。工芸家。近年はアロマに注力している。

『緑の生活』(角川書店)、『日本の森から生まれたアロマ』(世界文化社)、『森の旅 森の人』(世界文化社)その他著書多数。

■書誌/ 1994年12月小学館発行、A5判/191頁。

な性質・色合・木目を持った木が面白い。

桐といえば和箪笥代名詞。一昔前まで嫁入道具必須アイテムだったが、生活変化で少なくなった。同じように桐の下駄も軽く履き心地よい高級品で、明治・大正風俗誌を読むと「下駄自慢」が少なくない。私が唯一持っているのは文箱で、何を入れたか忘れてしまった。桐は「国内で最も軽く比重が0.2-0.35くらいで…過度の強度があり割合狂いが少ない」(128頁)。

柘(黄楊・ツゲ)は石のように硬い黄色味を帯びた材で、何といっても櫛が代表的。本当に美しい道具。伊豆諸島御蔵島の柘は高級将棋駒に使われており、さまざまな文様は素晴らしい。

桜=花になってしまいがちだが、和菓子型や木版版木として活用してきた。「より緻密な彫り物に向く」(180頁)、筆者はもっと用材としての桜を強調している。

私が最も好きなのは明るい色をした桂の碁盤。榧(カヤ)製の方が高額だが、温かみのある色や石を打った音が心地よい。トレイ・箱にもよく使われる。本書筆者も情熱をこめて桂を紹介している。

どの木も有用で、それぞれの役割を果たしている。本書の中で紹介されている家具・工芸品・道具の写真も美しい。日頃、講義や仕事に使う<さもしい>一夜漬読書ばかりだが、こうした美しい本の頁をめくるのは楽しい一時である。

\*1:『森林飽和/国土の変貌を考える』(NHKブックス)が今日の複雑な問題を考えさせる。

\*2:神戸市にある竹中大工道具博物館が参考になる。それにしても少ない道具であれほど見事な建築を作ったことに驚かされる。